

雪解ゆきげ

今年の冬は存外過ごしやすかったのではないか。それでも寒さはだんだん苦手になってきた。小林一茶の「雪とけて村いつばいの子どもかな」今も昔も変わることはない子どもたちの行動パターンに、季節の変化を微笑ましくも感じている。図書館の喫茶コーナーの花々は淡い彩りを成し、香りを漂わせている。▼「春」の字は草と日によりつくられ、陽光と関係のある字としている（「字統」白川静）。ちなみに「蠢」もまた虫が動き出す春の字とすること。同辞典には動く・輝くの意を持つのが春と記されている。石狩の春陽三題は、始めに石狩川にスガ※の流れる様。2つ目は春の沖、プランクトンの大発生により、鉛色から緑乳色へと変わる様。3つ目は神様の宿る木々の少しふくらんだ新芽かな。いや、砂と混じり合う雪と砂のミルフィーユも面白い。▼春告魚はもちろん「鱈」だ。本場石狩湾に網あげの声を見つけ、春がやって来たとなる。最近はずっと素冷却コンテナの出現により、東南アジアへの刺し身の空輸も可能となった。昔、金肥きんぴと言われ、足の早い鯉も東南アジアに石狩の春を告げに往く。石狩の春待つ自然の旋律は、私たちの身も心も活性化させてくれる。二つ一つの事はまるで音符のようだ。（市長）

※石狩川の解氷

# 広告